

日 中交流にとって多事多難なこの時代、ジャパンファウンデーションでは2005年の春より「21世紀日中交流特別事業業務室」（略称「日中業務室」）を立ち上げ、新時代のための文化交流を新たに模索しはじめました。

ジャパンファウンデーションがこれまで行なってきた中国との文化交流事業は、例えば、日本語教師・日本研究者や関係教育機関への支援、そして芸術交流や文化人の交流などでした。それらは重要な意義を持っていましたが、これからはそうした既存の枠組みに加えて、さらに大きな交流を「開く」ことが必要になってきています。

そこで私たちは、日中交流の行き詰まりを打開するためにも、もっと両国の人々が人間同士、さまざまな形で出会い、ふれあい、胸襟を開き、相手の存在を肯定的に受け入れる状態をつくっていくことが大事だと考えました。できるだけ多くの両国国民に参加を呼びかけ、お互いの「顔が見える」状態をつくりあげたい……。そうすることに よって、さらに広い「国民交流」の流れを形づくっていかうという発想です。

「日中業務室」の事業の試みは、05年夏からささやかにスタートしました。いくつかの事業をご紹介します。掲げた三つの事業の柱は以下のようなものです。

①人と人の顔が見える交流と対話：日中交流の「井戸を掘った人」に学ぼうと、戦後の新中国に残って社会の発展に貢献した日本人の方々の講演会を北京・天津で催したり、日中国交回復時に中国人の日本語通訳を務めた王効賢女史の講演会（22ページ参照）を東京で行ないました。また点字で日本語を学ぶ「青木学校」の中国人学生と教師を日本に招きました。

日中交流を、 開けよう

「日中業務室」とその展開

辻本勇夫（つじもと いさお）
ジャパンファウンデーション
文化事業部審議役
日中業務室次長を兼任

②日中双方で交流を支えるネットワークの形成：日本で学ぶ中国人留学生と、それを支援する機関のネットワークを準備しています。中国では、私たちの北京事務所の主導で日本人留学生のネットワークが始まりました。

③多様なメディアを駆使した情報発信：中国語のインターネット・サイト「共同網」のスペースを借りて、05年11月から毎週、日中のオピニオン・リーダーにコラム「My Opinion—心々相印」を

舞台上に自由な意見を発表してもらっています。中国各地でFMラジオによる日本のJ-POPの音楽番組も1月からスタートしました。

さて今年春から、この試みは「日中21世紀基金」（仮称）として拡大されることになりました。日本政府からジャパンファウンデーションに対する出資金が増額され、日中新事業を始めることが正式に認められました。人物交流事業として中国の高校生・大学生など若者の招へいに重点をおき、財団法人日中友好会館（東京）が行なう若者交流事業と連携しながら進めていくこととなります。一方、中国でも並行して政府が基金を設置し、中日友好協会を窓口にして若者交流中心の事業を行なっていく予定です。日中双方が手を携えて、新しい交流の流れをつくっていく時節が到来しました。

論語に曰く、「徳は孤ならず、必ず隣有り」。お隣りとの交流は簡単そうに見えて難しいものです。隣人を知っているようで見え、顔を見ているようで見ていません。しかし、お互いが興味を持ち、知り合えば必ず友人になれるという意思さえ持てば、必ず新時代は「開く」でしょう。困難な今の時代はむしろ好機到来と考えることができます。

●